

幼児の情緒的意味の測定



賀 集 寛
仲 田 啓 子
三 宅 敏 子



合、われわれの心のなかに何らかの感情やイメージが生じる。たとえば、元気だとか活発だとかいって感じがする。ことばに対するこのような内的状態は、情緒的意味と呼ばれる。このように、ことばの意味には指示的な意味と情緒的な意味の二つの側面がある。これらのうち、指示的意味は、人々の間で一致するのが普通であるが、情緒的意味は必ずしも一致しない。「イス」を例にとると、ある人は、

子どもは、幼稚園にはいる頃には、日常生活にほとんど事欠かぬほど多数のことばを習得している。日常生活に事欠かぬのは、

言葉が豊富だけでなく、子どもが理解し、使用することばの意味と、周囲の人のそれとが一致しているからである。たとえば、子どもが「イヌ」といったとき、その子どももこれを聞いた人も同じものを指しているから話を通じるのである。

さて、「イヌ」という語が犬という動物のことを指すように、ある語があるものを指すとき、これは指示的意味、あるいは外的意味と呼ばれる。ところで、「イヌ」ということばを聞いた場

すき・元気・愉快と感ずるが、別の人は、きらい・こわい・つよい・にくいという感じ方をするかもしれない。

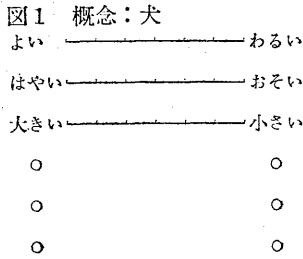
次に、このような情緒的意味には、人の実際の行動のなかだちをする働きのあることが、最近わかってきた。⁽⁹⁾たとえば、犬に對してよい感じを抱いている子は、「犬が来たよ」といわれると、その方へ飛んで行くだろうし、反対に犬によくない感じ方をしていいる子ならば、その場から逃げ出すかもしれない。このように、二人の子どもが「犬」という同じことばを聞きながら（いいかえると指示的意味は同じであるのに）、実際の行動が正反対なのは、

情緒的な意味のちがいがいによるのである（左図参照）。

犬 ↓ よい 情緒の意味 ↓ 近づく
犬 ↓ わるい 情緒の意味 ↓ 逃げる

セマンティック・ディファレンシャル
意味微分法（S D 法）

情緒の意味を客観的に測定する方法が、今から十年ほど前に、オスグッドという学者によって考案された。これはセマンティック・ディファレンシャルといい、日本語では意味微分法と訳される。そして一般には、S D 法と略称されている。これについてはわが国でもたとえば、芳賀や田中をはじめ数多く紹介されているのでその詳細は省略するが、その要点のみを簡単に述べると次のとおりである。「よいーわるい」「はよいーおせい」「大きいー小さい」というような正反対の意味をもつくつかの（普通は十五―二十）形容詞対を両極に配して、この間をいくつかの段階（一般に七段階）に分ける。そして、ある概念がこれらの形容詞尺度のそれぞれどのあたりに位置するかを評定するのである。たとえば、犬ということばが、「非常によい」「非常にはい」「やや大きい」



と感ずれば、上の図1のなかにチェックすればよいのである。次に、これらの形容詞対は主として次の三つの因子にまとめられることがわかった。すなわち、評価・力量・活動の三因子である。評価は、「よいーわるい」「美しいーみにくい」…；力量は「大きいー小さい」「強いー弱い」…；活動は「はよいーおせい」「積極的ー消極的」…、といった形容詞対である。そして、概念はこれら三つの因子を主軸とする意味空間のどこかに定位されるわけである。

S D 法の子どもへの適用

S D 法は、主としておとなを被験者にして、基礎的研究はもとより、教育・臨床・広告・市場調査等の各方面に広く応用されている。(9)(10) もしもこれを子ども、とくに幼児に適用しうるなら、園児の情緒的意味の特徴を知ることができる。そしてこのことはまた、園児の用いる（あるいは理解する）形容詞、もしくは形容詞的な語の実態を知ることにも役立つと考えられる。ところで、S D 法を子どもに適用した研究もいくつかなされている。これらのほとんどは小学生までの年齢段階だが、その主なものを簡単に述べると次のとおりである。

ケイガンほかの研究によれば、六―八歳児に十一の形容詞対の特徴をあらわすのに、見なされた絵（たとえば、強いー弱いな

ら、強いうさぎと弱いうさぎ、大きいー小さいなら、大きいポーターと小さいポーターを多数用意して、父・母・自分を評定させた。その結果、おとながこれらの概念に対して持っている意味に類似した意味を有していることがわかった。マルツは、小学校二、四、六年児と大学生を被験者にして、七つの概念(キャンデー・太陽・友だち・学校・火・子猫・ゆうれい)を、評価、力量、活動の三因子各三対をふくむ九尺度(各尺度は五段階評定)で評定させた。その結果、小二↓大学生になるに従って年齢間の一程度は少なくなるけれども、SD法が子どもの意味測定に有用であることが見いだされた。このほか、アーウィンとフォスター、ディ・ベスタ、小嶋、森本の研究をはじめいくつかの研究において、小学生を被験者として用いられている。以上をまとめてみると、小学校の低学年児であっても、その意味構造と、おとなの意味構造とはかなり共通した側面があるということが出来る。

では、もう一段階年齢を下げて幼稚園児ではどうだろうか。筆者たちの知る限りでは、幼児のSD法に関する文献は非常に少ないけれども、前述の小学校の研究から推察して、適用することは、まず可能だと思われる。また、子どもは、いろいろなことがらに対して、「よい」「わるい」「すき」「きらい」という表現をしばしば用いているところから、SD法の評価因子については、かなりはっきりした評定がなされるのではなからうか。このほか

「強い」「弱い」「大きい」「小さい」などもよく用いる語なのでSDに使用する形容詞対を子どもにとって親しみあるものになれば、適用自体は可能だと考えられる。

幼稚園児と小学校低学年児におけるSD法の信頼性

幼児に適用する場合問題となるのは、小嶋も指摘していることく信頼性である。すなわち、同じ概念に対するSD評定が、何回行なっても安定して同じ結果になるだろうかということである。

幼児はそのときどきの思いつきで、あるときは「よい」と判断したのに次のときは「わるい」というかもしれない。また、検査者の質問の仕方やちょっとしたことに暗示されやすいかもしれない。

SD法の信頼性に関しては、おとなの場合は相当高いことが報告されており、それ以下の年齢では、小学五年生の場合でもかなり信頼性があるという報告がある。従って小学校の高学年位までは大体信頼性があるとみなしてよいと考えられる。そこで筆者たちは、以下の小研究において、幼稚園児におけるSD法の信頼性の検討とともに、小学校低学年児の信頼性の検討をも問題としてとりあげた。なお、信頼性をしらべる方法は種々あげられるが、今回は再検査法を用いた。

方法 SD尺度 山本ほかのSD尺度に従って形容詞対を選んだが、予備的な研究結果に基づいて最終的には図2のような十対

の尺度を構成した。これらのうち、「気持ちがよい—気持ちが悪い」「明るい—暗い」「好き—きらい」は評価尺度（五点段階）、「大きい—小さい」「かたい—やわらかい」「強い—弱い」は力量尺度、そして「深い—浅い」「速い—遅い」は活動尺度である。なお、「にぎやかな—さびしい」は評価・活動の混合尺度、「元気な—元気でない」は三因子の混合尺度である。

概念 子どもがよく知っている次の七つのことばを選んだ。すなわち、日曜日、バナナ・お母さん・幼稚園・海・犬・汽車である。被験児は表1のとおりであった。なお、これらの被験児の知能その他の能力は、平均的レベルのものを選択した。

手続 検査者対子ども一対一で行なった。たとえば「幼稚園」

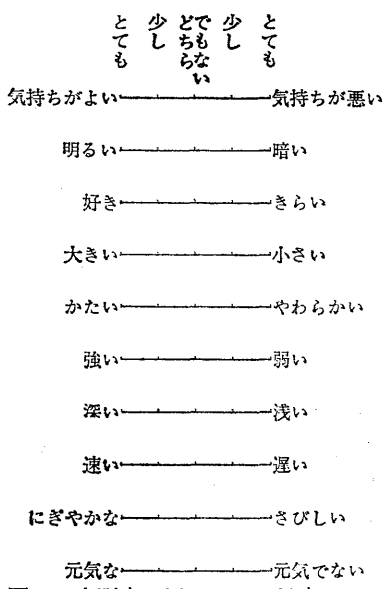


図2 本研究に用いたSD尺度

同		同		同		同	
同		同		同		同	
同		同		同		同	
園・校名	K小学校 (岡山市内)		S幼稚園 (岡山市内)		園・校名		園・校名
クラス	三年	二年	一年	年少	年少	クラス	クラス
男子人数 (年齢)	12 (九歳二カ月)	12 (八歳二カ月)	12 (七歳〇カ月)	12 (六歳二カ月)	12 (五歳一カ月)	男子人数 (年齢)	男子人数 (年齢)
女子人数 (年齢)	12 (九歳二カ月)	12 (八歳二カ月)	12 (七歳一カ月)	12 (六歳三カ月)	12 (五歳三カ月)	女子人数 (年齢)	女子人数 (年齢)
全体的人数 (年齢)	24 (九歳二カ月)	24 (八歳二カ月)	24 (七歳一カ月)	24 (六歳三カ月)	24 (五歳二カ月)	全体的人数 (年齢)	全体的人数 (年齢)

については、図2の用紙を示しつつ、「〇〇ちゃんは幼稚園は好き？ それともきらい？ それとも好きでもきらいでもない？」といって、もし、好きと答えたなら、「とても好き？ それともすこし好き？」また、きらいと答えたならば、「とてもきらい？ それともすこしきらい？」と聞いて、用紙の該当箇所を指でさえてもらった。

なお、一つの尺度内で形容詞の提示順は固定しなかったし、十の尺度の提示順も一定にならないように配慮した。以上のような手続は比較的容易に子どもに理解されたようであり、また、かなり興味をもって検査に参加してくれたように思われた。検査所要時間は七語完了するまでに十五ないし二十分であった。

再検査 以上の方法で一回目測定し、その一週間後に、信頼性をみるために同じ方法で再検査を行なった。

結果 セマンティック・プロフィール 得られた評定の中央値

図3 幼稚園年少児と年長児の1回目と2回目のセマンティック・プロフィール

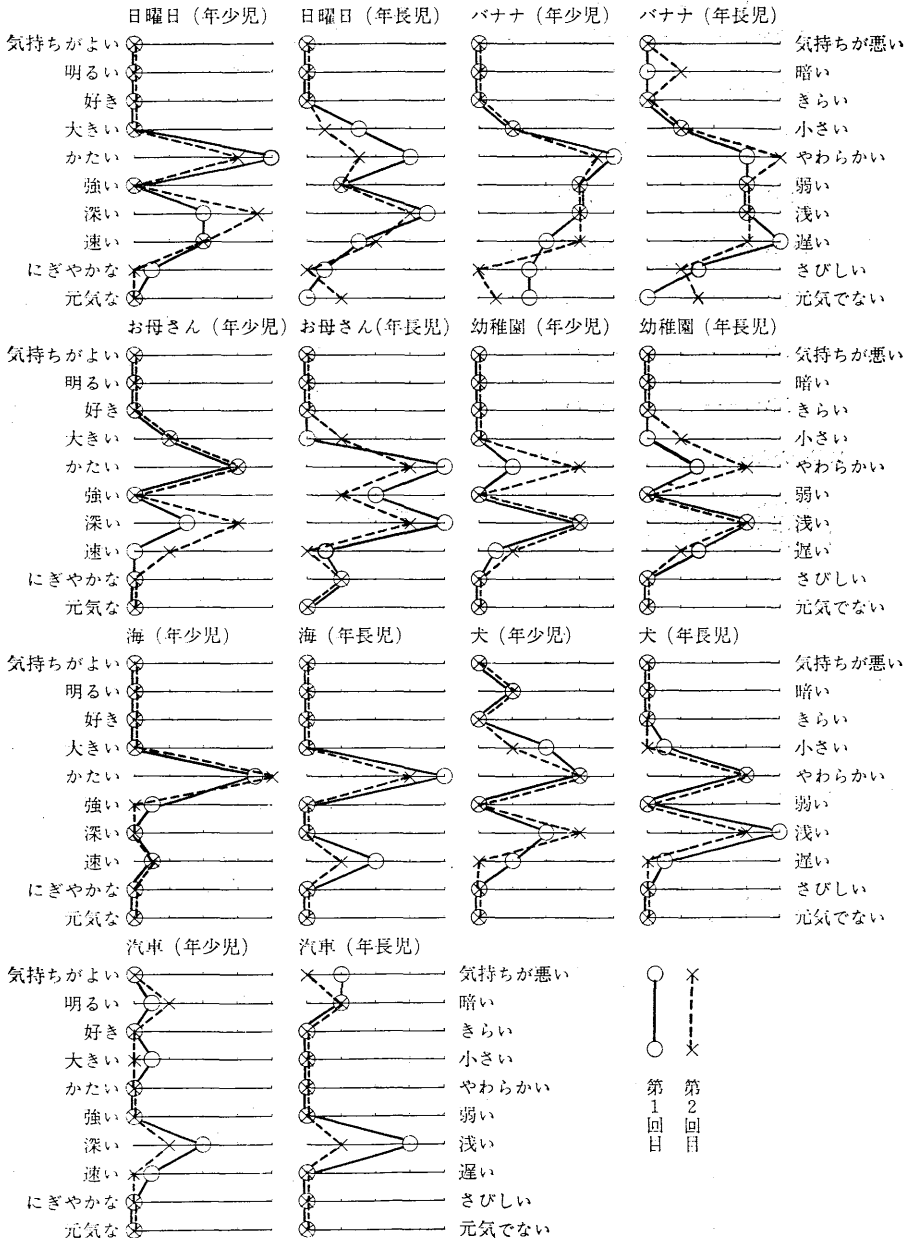


表 2 1回目と2回目の評定間の
相関の中央値

学 生	男 子	女 子	全 体
年 少	.41	.42	.42
年 長	.40	.46	.44
小 1	.51	.58	.55
小 2	.59	.61	.60
小 3	.59	.68	.64

を、五つの学年段階・性別・七つの概念・検査回数別に求めて、セマンティック・プロフィールをえがいたが、紙面の都合上年少児と年長児についてのみ示すと、図3のとおりである。二、三の尺度においてズレがかなりあるが、年少児・年長児とも各概念の二回にわたる評定は、大体同じような傾向にあるといつてよい。

一回目と二回目の評定間の相関 次に、一回目と二回目の評定間の相関係数を個人ごとに計算した（七概念、百二十名の被験児であるから相関係数の総数は八百四十に達した）。これらを学年別、性別にまとめ、それぞれ中央値を求めたのが表2である。

これによると、年齢増加とともに相関は増大の傾向にある。しかし年少児と年長児の間には大差はない。また、どの年齢段階においても、男子よりも女子の方が高い相関を示している。

次に、相関係数の有意性をtテストでしらべると、今回の場合、5%水準では $r_{.05}$ 以上なければならぬ。この基準に照らしてみると、相関が年齢とともに増大するとはいえず、小三においてはじめて有意になり、それ以下の段階では必ずしも有意とはいえない。つまり信頼性は小三以前は余り高いとはいえない。

一回目と二回目の評定のズレ 相関とは別に、一回目と二回目の個人の評定のズレの大小によって信頼性をしらべる方法を用いた。この場合、評定のズレの方向は問題にせず、ズレの絶対値を求めた。これらを各尺度別・学年・性別にまとめたのが、表3である。これによると、年齢とともにズレは減少する。また女子の方が男子よりもズレは小である。次に、尺度別にみると「好き—きらい」「気持ちがいい—気持ちが悪い」「元気な—元気でない」「深い—浅い」「速い—遅い」はズレが大である。このように尺度によってズレに差がみられるが、この差は年齢とともに少なくなる。次にズレを三つの因子尺度別にしらべると図4のとおりになった（なお混合因子は省いた）。これによると、評価尺度がズレが一番少ない。次いで力量、活動の順となる。そして、どの因子尺度も年齢とともにズレは減少する。しかし、評価尺度についてみると、年少児、年長児の段階でもズレは○・八以下と非常に小さくしかも、力量、活動尺度の小二、小三のレベルのズレ(○・九前後)よりも小さいことは注目に値する。つまり、評価尺度は他の二因子尺度よりも、すでに幼稚園児の段階において、かなり信頼性が高いとみてよいだろう。

考察と結論 以上の結果をまとめると次のことがいえる。

一、SD法の信頼性は、尺度全体をとおしてみると、相関、ズ

表 3 尺度別にみた1回目と2回目の評定間のズレの平均値

尺 度	年 少			年 長			小 1			小 2			小 3		
	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全
気持ちがよい-気持ちが悪い	.90	.37	.63	.86	.71	.78	.65	.61	.63	.71	.66	.69	.55	.64	.59
明るい-暗い	1.10	.93	1.01	1.29	.90	1.09	.74	.67	.70	.59	.83	.75	.77	.44	.61
好き-きらい	.64	.34	.49	.50	.43	.46	.40	.34	.37	.39	.30	.34	.34	.25	.30
大きい-小さい	1.07	.87	.97	.96	1.01	.98	.89	.86	.87	.54	.66	.60	.69	.73	.71
かたい-やわらかい	1.73	1.19	1.46	1.43	1.06	1.24	.92	.97	.94	.99	1.00	.99	1.07	.83	.95
強い-弱い	1.07	1.07	1.07	1.29	1.10	1.19	1.10	.92	1.01	1.10	.74	.91	.99	.89	.94
深い-浅い	1.71	1.29	1.50	1.31	1.41	1.36	1.34	1.09	1.21	1.10	1.00	1.05	1.30	1.12	1.21
速い-遅い	1.49	1.27	1.38	1.47	1.20	1.33	1.26	1.40	1.33	.97	1.09	1.03	1.07	.94	1.01
にぎやかな-さびしい	1.46	.89	1.17	1.46	.86	1.16	.89	.76	.81	.73	.54	.64	.79	.59	.69
元気な-元気でない	.96	.57	.77	1.03	.87	.96	.56	.46	.50	.80	.80	.80	.53	.50	.51
平 均	1.21	.89	1.06	1.16	.96	1.06	.90	.81	.86	.80	.76	.79	.81	.69	.77

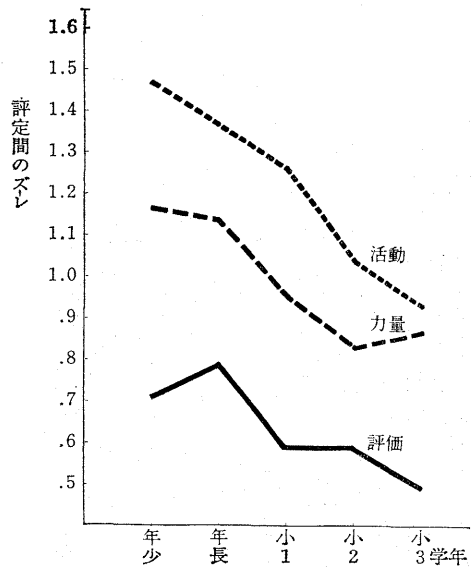


図 4 評価・力量・活動3因子別にみた1回目と2回目の評定間のズレ

レの二つの測度とも、幼稚園児の段階では低く、それ以後増大の傾向にあるが、小三に至ってかなり高い信頼性が得られる。

二、SD尺度別にみると、評価尺度については、幼稚園児においてもかなり高い信頼性を示しているとみられる。三、どの年齢段階、どの尺度とも、女子の方が男子よりも信頼性は高い。

かくて、幼稚園児においても、評価尺度に関しては信頼性が認められた。しかしこのことは、本研究で用いられた概念が評価因子を多くふくんでおり、評定しやすかったためかもしれない。もし、評価的な評定のしにくい概念が用いられていたならば、はたして今回のような高い信頼性を得たであろうか。しかし、オスグッ

(9) トによると、おとなのSD信頼性の研究において尺度別の分析をしているが、やはり評価尺度において信頼性が最も高かった。また同じ彼の研究によると、評価因子が最も基本的であることが認められており、また、ディ・ヘスタも発達のみると、評価因子が最も早期に確立されている旨を示唆している。このような諸事実を考慮すると、本研究において、評価尺度が他の尺度にくらべて、幼稚園児においてすでに安定した結果を得たことは、情緒的な意味の発達の一般的な傾向を反映したものとみてよいだろう。そして、幼稚園児の評価的な意味が安定していることは、この時期の子どもがしばしば口にする評価的な意味をあらわすことば(よい・わるい、きれい・きたない、すき・きらい…)の理解と使用の仕方が、かなり安定していることを示唆すると考えられる。

参考文献

- (1) Ervin, S. M., & Foster, G. The development of meaning in children's descriptive terms. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1960, 61, 271-275.
- (2) DiVesta, F. J. A developmental study of the semantic structures of children. *J. verb. Learn. verb. Behav.*, 1966, 5, 249-259.
- (3) 芳賀純 意味微分法と言語心理学 波多野・沢田(編)現代の言語心理学第二部第三章 牧書店一九六五
- (4) 芳賀純・津留宏 意味の安定性に関する一研究日本心理学会第三十一次大会発表論文集一九六七、一五九
- (5) Kagan, J., Hosken, B., & Watson, S. Child's symbolic conceptualization of parents. *Child Developm.*, 1961, 32, 625-636.
- (6) 小嶋秀夫 セマンティック・ディファレンシャルによる親の態度・行動の情緒的意味の記述の次元 金沢大学教育学部紀要一九六六、一五、五九一七五
- (7) Maltz, H. E. Ontogenetic change in the meaning of concepts as measured by the semantic differential. *Child Developm.*, 1963, 34, 667-674.
- (8) 森本 博 Semantic Differential法による対人認知の発達の研究 神戸山手女子短期大学紀要一九六八、一一、五一-五九
- (9) Osgood, C.E., Suci, G.J., & Tannenbaum, P. The measurement of meaning. *Urbana Illinois: Univer. Illinois Press*, 1957.
- (10) 田中靖政 記号行動論 情報科学講座C・12・3 共立出版一九六七
- (11) 山本和郎・西村恕彦・野村健二・鮎戸弘・岡部馨子 SD法による日本語の意味構造の研究市場調査一九六〇(八二二号) 付記、本研究実施に際して、ご協力いただいたK小学校およびS幼稚園の諸先生方に厚くお礼申し上げます。
(ノートルダム清心女子大学)